

平成23年度 第1回経営協議会議事要旨

日 時 平成23年6月24日（金） 15時58分～17時33分

場 所 学長室

出席者 (学外委員) 井田委員, 大平委員, 沖田委員, 指山委員, 中尾委員,
(学内委員) 佛淵学長, 瀬口委員, 中島委員, 米倉委員, 宮崎委員,
鈴木委員, 上野委員

- ・議事に先立ち, 学長から前回議事要旨の確認について依頼があった。
- ・学長から, 配布資料について説明があった。

【審議事項】

(1) 国立大学法人佐賀大学職員給与規程の一部改正について

学長から, 本件は, 国家公務員の病気休暇制度が見直されたことに伴い, 本学もその見直しに準じた所要の改正を行う案件であり, 内容としては, 期間の定めがなかった制度を90日間までは病気休暇を認めることと結核性疾患による病気休暇等の特例を廃止する旨の説明があり, 審議の結果了承された。

(2) 国立大学法人佐賀大学予約型奨学金実施規程等の制定について

学長から, 本件は, 前年度第3回の経営協議会において提案された件でもあり, 本学に強く入学を希望する成績優秀な学生を確保するために予約給付型の奨学金を設け, 愛校心にあふれた人材を育成するために制定する旨とその選考方法等について概要説明があり, 審議の結果了承された。

その後, 委員から, 国立大学での取組みが少ない理由の質疑があった。

(3) 契約医療技術職員(コ・メディカル)の処遇改善について

学長から, 本件は, 契約医療技術職員の待遇改善を図るため, また, 給与構造改革による昇給抑制措置が終了したことなどを踏まえ, 従来, 給与決定時において, 勤務経験年数を常勤職員の8割換算で実施していたものを, 常勤職員と同様の決定方法等に見直す旨の説明があり, 審議の結果了承された。

- (4) 平成22事業年度に係る業務の実績に関する報告書(案)及び平成22年度自己点検・評価書(案)について

学長から、本件は、今月末に国立大学法人評価委員会に提出する「平成22事業年度に係る業務の実績に関する報告書」と共に、取りまとめ公表する平成22年度年度計画の実施状況等の「自己点検・評価書」に関する案件である旨と年度計画の取組みにおける教育、研究、社会連携・社会貢献、国際化等々の実績について説明があり、審議の結果了承された。

- (5) 附属病院勤務医師等に対するインセンティブ給与支給について

学長から、本件は、前年度から実施しており、附属病院勤務医師等の処遇改善を図るため、インセンティブとしての給与支給(一時金的措置)を前年度同様に措置するもので他大学でも取組んでいること及び総人件費改革の中での措置となる旨の説明があり、審議の結果了承された。

- (6) 平成22年度決算について

学長から、本件は、平成22年度の決算に関するもので、総利益の主な要因として、病院収入の増や退職手当支給対象者の減等があり、その結果、対前年度16億5千6百万円増の32億6百万円となっており、また、目的積立金として繰越申請を行う額は29億9千2百万円で、そのうち23億1千1百万円を病院再整備等に係る分として予定している旨の説明があった。

また、今年度決算から、国立大学法人会計基準等の改定に伴い、資産除去債務に係る会計処理を適用している旨の説明があり、審議の結果了承された。

- (7) 平成24年度概算要求事項について

学長から、本件は、平成24年度概算要求事項に関するもので、特別経費のプロジェクト分、全国共同利用・共同実施分及び基盤的設備等整備に係る分、また、施設整備費補助金及び施設費交付事業費に係る要求順位等について概要説明があり、審議の結果了承された。

- (8) その他

特になし。

【報告事項】

- (1) 第1期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果について

学長から、本件は、前回の経営協議会で報告した、第1期中期目標期間

に係る業務の実績に関する国立大学法人評価委員会からの通知内容（原案）に対し、「意見の申立ては行わない」と報告し、その原案どおりに確定されたものである旨の報告があった。

その後、委員から、教育の項目で、「非常に優れている」のS評価を受けている唯一の大学について質疑があった。

(2) 国立大学法人の中期目標を達成するための計画（中期計画）の変更の認可について

学長から、本件は、前年度第3回の経営協議会で審議された中期計画の変更案であったボート艇庫の土地譲渡の件が認可されたものである旨の報告があった。

(3) 佐賀大学キャンパスマスタープラン2010について

学長から、本件は、「佐賀大学憲章」に基づく「佐賀大学中長期ビジョン」並びに国の施策を踏まえ、本学のキャンパス整備方針を定めるために作成した旨の報告があった。

(4) 今夏の節電対策について

学長から、本件は、九州電力からの節電協力依頼もあったことから、本学でも15%程度（病院は5%）の節電対策を実施しようと計画したものである旨及び節電パトロール隊による取組み等について報告があった。

(5) その他

○ 国家公務員の給与減額支給措置について

学長から、東日本大震災に対処する必要性から、国家公務員の給与臨時特例に関する法律案の閣議決定と本学の教職員も準じた減額支給措置となる旨の報告があった。

○ 海洋エネルギー研究センターについて

委員から、海洋温度差の熱発電の実用化について質疑があった。

【意見交換】

◎ 大学における人間教育のあり方について

学長から、本件については、教養教育の面から議論した場合、教養教育以前の問題であるとか、また、平成21年度第4回の経営協議会の意見交換において、求められる人材として「人間の背骨部分を形作るような教育を期待する」などの意見があったことを踏まえ、本学としても全学教育機構を設置

し、インターフェースという社会との接続を意識した教育を行った場合、エチケット、モラル及び倫理観等の基本的な教育が現代の学生に不足していることを痛感していることなどから、今後、自立した一人の人間としての根幹となる人間力を高めるための参考となる意見を伺いたい旨の説明があった。次いで意見交換を行い、委員から次のような意見等が出された。

(●は学外委員の意見等、○が学内委員の説明等)

- 震災のボランティア活動に社員が自発的に参加しており、参加者のその後の言動から、人間としてあるべき姿を教えてもらって帰ってきた様に感じています。
- 読書だけでなく、実体験から会得した教育ということになると思います。

- 体験することは確かに大切で、自社でも新人教育に介護施設、製造あるいは医療現場等への派遣体験を実施し、その現場を体験させることで各人の職業意識の理解力を高めている。また、社会人として自立した一人間であるために知識と行動力がバランス良く備わっていることが大切で、その中でもコミュニケーション能力が一番大切であると認識していることから、新入社員に対し出退社時の挨拶は厳しく指導しており、派遣先等から好印象を得ている。以上のことからインターフェース教育を考慮した場合、実体験を検討された方が良いと思います。また、本テーマの「人間教育」について調べた結果、吉田松陰の人間教育及び慶応大学での人間教育講座が示されたことを踏まえ、「人間教育の基本は何であるのか」を考えた場合、「人は何故生きるのか」、「何のために生きるのか」また「どう生きるのか」を教育の場で各人に考えさせ、生き方を発見させたり、気付かせたり、実践させたりすることが「人間教育」の基本であると感じた次第であります。このことから、佐賀大学が本テーマを考えた場合、「教育者とは一体どうあるべきか」、教育の原点が「何か」を教員全員が再度確認し、学生側から見た場合、理想の先生となれるような教育者に自分自身でも意識改革を行うなど、供給サイドでも再考する必要があるかと思えます。
- まさしくそのとおりだと思います。医師としては、後輩を育てるという意味では、コミュニケーションが多いのでやり易いと思います。
- 医学部は先生の姿を見せるだけで良いが、他の学部での良い姿を見せる方法は難しいと思われまます。
- 本学でも学生の挨拶について話題となり、医学部の学生は普通に挨拶するが、本庄地区では挨拶する学生が少ない状況です。また、近隣にある西九州大学では、挨拶を徹底させています。

- 教育について意見を申し上げることはないですが、今回の震災から、日本人は凄いなと評価を受けたことは、「一体何なのか」を考えた場合、政治家や国家公務員（役人）は、人間学や人類愛が根本的に欠けていると思われるが、国全体が評価を受けていることは、個人の行動である日本の国風であり、その国風は長い歴史の中から培われたものだと思います。そこで、今回の震災を機に、価値観や世界観等が変わる時であり、国風について国民同士または若者との議論が必要だと思いますし、教育者も人間学を学んでこそ教育者所以であると思います。

- 具体的なことでは、教養課程の中で、佐賀大学の卒業生、企業、思想家の方々を上手く活用され、講演だけでなく、お互いの意見交換の機会を設けたら良いのではと思っております。

- 慶応大学の人間教育講座の中でも倫理道德教育委員会を設置し、多方面の方々とのディスカッションを学生も交えて実施しているようです。
- 大学においてもキャリア教育等で講演は実施していますが、一方的な受け身でなくディスカッションの場にすることが肝心だと思います。
- 人の生き様を見せるために語り合うことが必要だと思います。

- ゆとり教育世代の学生が社会人となった今、基礎的な知識・教養や文章のリテラシー等が著しく低下しており、会話以外でのコミュニケーション方法が心配なレベルになってきていると思われる。また、日本史を選択していないので吉田松陰を知らないということに対し、恥じる心がなくなっているように思います。こういう点からもリベラルアーツ（教養）の必要性及び復権を打ち出して良いのではと思われる。また、大震災の前後で日本は社会的に区別されるため、震災体験の地区とそれ以外の地区では、数年後に同じ日本社会の中で断絶が生じるのではと危惧されますので、今、震災に対し何ができるかを学生に考えさせることが重要なことだと思います。また、震災で発揮された日本社会の均一性とか優しさが素晴らしい故に人と争うことなどが「悪」であるかのような価値観が生まれることは好ましくないと思います。
- 最近では、幼稚園などで論語を教えているところもあるみたいです。
- 確かに、人の教育は幼少や赤ん坊の時からすべきと言っている先輩の医師もいます。ゆとり教育が影響しているのかわかりませんが、医学部の学生の学力低下もここ数年間見受けられます。また、高校側からは、大学受験の科目数の減少も要望されています。

- 文化教育学部としては、確かに学力の低下は歪めない状況にあります。何故かと言いますと、受験偏差値で大学を選択する傾向にあり、本学を希望しているのかと言えば第二希望の学生であったりして、入学時のマイナススタートから再度学生のやる気を起こさせることは大変な作業であり、講座中心の講義も限界にきていると思います。そこで、学生に対し、どうやって社会と自分との結びつきを発見させていくことができるか、或いは自分の力が社会にどういう風に役立つのかを実感できることを教育のプログラムに組み込むなどの対策が必要だと思います。
 - 大学の教員もインターフェースが必要だと思います。そのためには、まず挨拶を率先して行うことだと思います。また、敬語の言葉づかいの区別に乏しい人が多く見受けられます。
 - 医学教育においても個人差はありますが、若い人には、患者様でなく自分中心で物事を考える人が結構多く見受けられます。
-
- 医学部の学生の学力及びマナーの低下を痛感しています。また、全国国立大学医学部長病院長会議におけるアンケート調査の中で、講義の受講態度が悪くなっていることが取り上げられており、そのマナーや学力の低下は、ゆとり教育の影響だと認識しています。その対策を考えた場合、現在は、情報量だけを多く教え、どの世界にいても役立つ事柄、所謂、背骨の部分の教えが不足しているものと思われます。なお、医学における教えは情報ではありますが、その情報も数年先には塗り替えられているものであるため不安でもあります。
 - 先生や目上の人を敬うことから、挨拶は出てくるものだと思います。
 - サークル活動などにおいても、先輩・後輩の関係がフラット化して、良いことのように思われている面があります。
-
- 学力の低下が言われていますが、授業のレベルは非常に高くなっているため、学生の理解力が懸念される点と物質的豊かさと精神的豊かさの関係から「志」が小さくなっているものと思います。
 - 豊かになりすぎたことで、自分の使命感や志の気持ちが薄らいでいることから、その使命感や志に気づかせてあげる必要があるかと思います。
 - 知識を多く与えるだけでなく、学生自身が自分で考え、行動を起こすような気持ちにさせる教育が必要だと思います。
 - 講義においても、教員自身がロマンを持ち、面白いといった気持ちを持つことが大事であり、学生に対しては工夫を凝らす必要があると思います。また、人間の究極の目標である死に至るまでの学問を教えることが

大事だと思います。

- 自身の体験は社会人となって初めて感じるものであり、また、人との接点により利用できるものであることから、体験や一緒に考える場を多く作りたいと思い、学長と共に、担当理事及び部課長並びに係員まで集い、大学の目的や情報を共有するやり方の中で、教職協働の機会を作っていきたいと思い取組んでいます。
- 大学の組織の中では、教職員の教育も大事だと思いますし、本日の意見交換の結論としては、全人的な教育が必要であることだと思います。また、私が目指しているのは、学生が学んで良かったと思える大学、言い換えれば面倒見のある大学であります。